

谷 村 文 庫

本文庫の寄贈者谷村一太郎氏は、藤本ビルブローカー銀行取締役会長などを歴任した実業家であり、また、明治・大正・昭和の三代を通じて菟書家として有名であった。

同氏は明治4年(1871)に富山県福光町の素封家に生れ、父友吉氏は地方有数の名望家で代々祖谷屋と云い、絹布の商いと殖産工業に力を尽したが、遺憾ながら家業は衰退に向った。一太郎氏は十三才にして家を相続し、発奮努力、東京に出て慶応義塾大学に入学したが、のちに早稲田大学に転じ同校を卒業した。帰郷してのち中越鉄道支配人となり、泉州紡績株式会社支配人を経て、明治39年藤本ビルブローカー証券会社に入社した。そのかわり湊鉄道株式会社社長、日本活動写真株式会社取締役、帝国人造絹糸監査役などを兼ね、所謂帝人騒動を巧みに乗り切り危機を脱した。

昭和7年健康を害したが、静養すること1年、漸く回復した。以後諸会社の重職を悉く辞して晴耕雨読を友とし、昭和11年(1936)3月13日京都中京区堺町通竹屋町の自宅で66才の多彩な生涯を閉じられた。

氏は実業界にあっては鋭才を駆使して華々しく活躍したが、その反面書窓の閑寂を愛し、秋村と号し(明治新聞界の先覚者、藤田茂吉氏が名付けた)、また別に石山(滋賀県石山寺の風景を愛したことから)、そのほか故郷の名山の名から二上太郎、東嶽隠士、匡王山人などのペンネームを持っていた。また、学究としての一面もあり、京都大学の教授達とも終始往来があつて、特に新村出博士とは度々書物探訪の旅行をした。

氏は晩年に郷土の学者、芸術家などの遺業を顕彰することに力を尽し、『中嶋棕隠と越中』昭和7年金沢書香会刊(中嶋棕隠は幕末の儒家、越中へ行って墨客と雅遊した)を著わし、また『校註老松堂日本行録』昭和8年東京大洋社刊(老松堂は明の宋希璟の号で、永楽18年明使となって来朝

し、足利義持に面謁した凡そ10か月間の紀行文)をも著した。さらに氏はその専門である経済、財政、金融においては、経済学者海保青陵(宝暦5年~文化14年)が金沢を根拠として加越の間を遍遊し講演をしたので、今も同地方の商業道徳が保たれているのを顕彰するため『青陵遺稿集』昭和10年東京国本出版社刊『青陵陰陽談』昭和10年高岡、野村書店刊『まびき』昭和10年金沢、宇都宮書店刊(氏が金沢の北国新聞に大正12年以来投稿したもので時事、経済、財政等の諸論を抜萃したもの)の如き経済学の専門的著述があることを見ても一介の事業家でなかったことが窺われる。

実業界を退いてからは、京都在住の書物愛好者十数人が毎月第一月曜日に集って何かと研究する「月曜会」の会員になった。此の会は学徒のみの寄合であつて、同氏以外には実業家は加わっていなかった。会員中には新村出、藤堂祐範、鈴鹿三七など本館ゆかりの人々も居られたようである。同氏は典籍収集に際しては、和漢の古典籍に特別な関心を寄せ、珍籍稀書の入手の為には大金を投じてでも惜しまなかったといわれている。

次のような逸話がある。昭和9年、書誌学者禿氏祐祥氏は東京の某が天文版の『難経俗解』を手離してもよいとの事を聞き大阪毎日の重役、高木利太氏に推薦した所、五山版には興味がないから暫く預って置くと話した事を谷村氏が伝え聞き、是非共入手したいと現品は尚落手しないのに代金200円を早速送り届けて入手された。若いサラリーマンの月給が20円位の当時の話である。

また、本館所蔵に帰した谷村文庫の中核をなす、猪苗代家連歌書類を入手した昭和5年6月の事、京大図書館嘱託鈴鹿三七氏の許に谷村氏が来て、近頃京都の某書肆に連歌の書物が一括して売りに出されていると人から聞いたので買おうと思うが、一度見てほしいと言ったので鈴鹿氏はお供した。当の連歌書類は、高さ二尺五寸、幅二尺程

の桐本箱に詰込んであった。蓋書は「仙台侯書東類 猪苗代」と墨書してあった。

これは仙台侯の愛顧を受けた猪苗代家の襲蔵のもので、他に類例をみない体系的な連歌の集書であった。その散逸するのを憂いて購入されたのが本館所蔵の猪苗代本である。以上の挿話は「秋村翁追懷録」(昭和12年金沢県立図書館刊)による。

なお、猪苗代家は兼載(文明2年～永正7年)を家祖とし、兼純より明治初年の兼道に至るまで代々連歌師をもって伊達家に勤仕した仙台藩の名家である。

猪苗代家本の中でも近衛信尹(天文14年～慶長19年)筆の『何木連歌』『何何連歌』、文明9年の飛鳥井栄雅(応永24年～延徳2年)筆の『連歌初学抄』等はことに特筆すべき連歌の逸品である。猪苗代兼載自筆『和歌活套』と『園塵』・猪苗代兼郁自筆『家業相統之記』、また、伊達藩主の消息、懷紙、伝授等大部分は徳川期の写本である。総計1705冊で300余年の風雪を凌いでよく保存されている。

猪苗代本以外に本文庫には、奈良朝写経生、占部忍男が写経料紙の下附を申請した神亀五年の解『申請筆事』、天平12年の東大寺施入の光明皇后の願経をはじめとする、奈良写経など。平安朝のものでは伝桓武天皇宸筆の写経、神護寺の紺紙金泥の装飾経などの写経。鎌倉写経では建保6年の大学頭藤原孝範の願文、室町時代では享禄3年版の『聚分韻略』、天文5年版の『八十一難経』等の稀観書が多数収蔵されている。

そのほか春日版、高野版、慶長・元和の古活字版等の各種の版式があり、特に五山版は豊富で、氏はこの方面の収集家として有名であった。応永11年刊の『仏祖正法伝』、貞和4年刊の『景德伝灯録』は何れも五山版であるが、宣和6年の『法苑珠林』、紹興18年刊の『経律異祖』等、宋版の内典類は十数巻収蔵され、『太平御覧』、『明修本尚書註疏』、『明修本礼記正義』等稀少な宋版の外典も収集されている。また『勅修百文清規』等の元版、『欒城集』等の明版の嘉靖20年刊行の古活字版もある。

なお、明時代の稀書として『永樂大典』を挙げ

なくてはならない。本書は巻12929～12930、1冊の零本であるが、箱書に徳富蘇峰がこの巻が明の高宗皇帝の部に属し、大典中の圧巻であると書いている。また、一説によると、この零本は中国の碩学、王国維が日本に携帯して来たもので、好事家の間で話が出来、内藤湖南博士や、富岡謙蔵氏等へ、渡された数部の内であろうとの事である。

(零本とは全巻でなく一部分のこと)

本文庫が附属図書館に寄贈されるようになった経緯についてふれておく。一太郎氏の遺子に四男あり、何れも翁の性格気風を受け継ぎ、各界に名を成していたが、氏の歿後兄弟相寄り蒐集された書物を将来永遠に保蔵し、その整理の上は死蔵せず、広く学者の為に公開することに合議一決し、長男順蔵氏の夫人の父君である元館長、新村出博士の進言を容れて昭和17年、愛蔵書9200余冊全部を本学附属図書館に寄贈されたのであった。

なお、本文庫の各冊毎に一太郎氏の雅号、秋村に因み「秋邨遺愛」の朱印を捺印して故人の遺徳と芳志を永久に記念している。又この文庫に対する利用が多く、文庫の総目録の刊行が久しく期待されながら徒らに時を過していたが、順蔵氏及び次男敬介氏より所要経費につき御協力を得ることになり、本館の職員が目録編纂し、昭和38年『京都大学谷村文庫目録』(235P. 書名索引付)を刊行することができた。

近年和漢書目録掛全員で、文庫中の貴重書を詳細整理する機会を得、目のあたりに宋版、古活字版等を展げて比較する事が出来たのは、新刊書ばかりで古書に接する事の少なくなった現在、多くの善本を蔵する本館に仕事を持つ者の喜びであり、一同谷村氏の遺徳への感謝の念をあらたにしたことであった。

(附属図書館 笹本光代)